The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | <図書紹介>近代日本デザイン史関係復刻文献 |
| Author(s) | 日野, 永一 |
| Citation | デザイン理論. 1993, 32, p. 116-118 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52747 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 近代日本デザイン史関係復刻文献

歴史研究では一次資料を通じての研究が重要なことはいうまでもない。歴史学の分野では重要な資料が復刻され研究の進展が図られてきたが，研究者の少ない分野では経済的な理由に阻まれて資料の復刻も少なく，また一般に原資料に直接目にすることは非常に困難である。近代日本のデザイン史研究においても同様で，なかには資料自身の存在から探らねばならないことさえ少なくなかった。

最近大変有難いことに，近代日本の美術関係の図書・雑誌の復刻版が相次いで刊行された。絵画関係が中心であるが，美術とデザインが完全に分化される以前の時期でもあり，デザインにとって重要な記事も少なくない。この機会に，多少発刊時期をさかのぼるものも含めて，私の目に触れた復刻版を紹介したい。なお，発行年は復刻版の，価格は発刊当時のものである。もちろん私の目のとどかなかった範囲で，これ以外の刊行も少なくないと思われるので，情報をお持ちの方は本誌にお寄せ願えたら幸いである。

黒川真頼『工芸志料』(昭和49年，平凡社，950円)。東洋文庫中の一冊。原本は明治11年刊。日本の工芸の歴史を内外に知らせるため，同年のパリ万博に向けて博物局から刊行されたものである。最初の日本工芸史の本として著名で，現在でも良く利用される。

同じ東洋文庫に，岩村透『芸苑雑稿・美術と社会・巴里の美術学生』(昭和46年，平凡社，750円）もある。岩村は明治末から東京美術学校で西洋美術史を講じ，美術評論家でもあった。本書は明治35年前後に刊行された論集をまとめたものであるが，当時の芸術至上主義的なパリの芸術家の雰囲気を伝え，また本格的なモリス論も掲載する。

横井時冬『日本工業史』(昭和57年，原書房，6,500円）には同じ著者の『工芸鏡』も含まれている。『日本工業史』は明治31年，『工芸鏡』は同27年の刊。前者は工業史と名をうってはいるが，江戸以前は内容的に工芸史としてよいものである。明治の近代工業の発展状況について知るのに便利でもある。後者は日本の工芸家列伝といったもの。両書とも昭和初期にも何回か復刻された。

アンソロジーというか，関係資料がまとめられた書物も刊行されている。

青木茂編『明治洋画史料 — 懐想編』『同 — 記録編』(昭和61年，中央公論美術出版，6,800円・8,200円）は，洋画史料中心であるが，パノラマに関する記事や種々の芸術論も載り，デザインにとっても無関係ではない。

以上は文書記録の復刻であるが，図版を中心とした図書も復刻されている。

昭和の初期に刊行された杉浦非水・渡辺素舟編『図案資料大成』8冊が，『世界人物図案資料集成』『世界動物図案資料集成』『世界植物図案資料集成』(技報堂出版）の3冊となって出版されたのは昭和34年であるが，これは復刻というよりも現在でも生き続けている本といってよかろう。

今でも書店の棚に常に並び，利用者も多い。

同じく昭和初期の図案集の復刊としては，和田三造編『創作図案集』（昭和52年，第一書房，30,000円）と大隅爲三編『萬国図案大辞典』（全7巻，昭和52年，第一書房，84,000円）がある。

また道具の図解辞典とでもいうべき『工芸百科大図鑑』（昭和52年，村田書店，33,000円）は，五姓田芳柳校閲・国府田範造編で昭和11－13年の刊行だが，明治以前の生活用具を知るには便利な図書である。

本格的な資料の復刻として，最近ゆまに書房から「近代美術雑誌叢書」として刊行された，明治期の多くの貴重な雑誌をあげねばなるまい。

『大日本美術新報』（全5巻，平成2年，59,740円）は，明治16年から20年まで刊行された50冊の雑誌。当時の美術の動向を知ることができる本格的な美術雑誌と呼んでよかろう。当初は龍池会と関係が深いことから同会関係の記事も多いが，やがてフェノロサたちの鑑画会関係の記事が増える。当時の美術は工芸品の輸出振興を主要な目的としていたことから，工芸論・産地の状況等デザインに関係を持つ記事も散見される。

『臥遊席珍』〔明治13年・5冊〕（全1巻，平成3年，11,948円），『東洋絵画叢誌』〔明治17－19年・16冊〕（全3巻，平成3年，29,355円）と『明治美術会報告』〔明治22-26年・22冊〕（全4巻，47,792円）は絵画関係の雑誌，『美術評論』〔明治30－32年，25冊〕（全4巻，39,552円）と『美術園』〔明治22－23年・19冊〕（全2巻，平成4年，20,600円）は美術評論関係の雑誌なので内容は省略。

『龍池会報告』（全4巻・平成4年，39,140円）は，明治12年に設立された古美術保存・伝統美術復興の先駆的団体龍池会の機関誌で，明治18－20年に刊行された31冊の復刻。林忠正「高岡銅工に答ふる書」・ワグネル「美術の要用」などの工芸論，平山英三による「ファルケ氏美術工業論」などの海外デザイン論の紹介，塩田真による輸出工芸の振興策等々，多くの記事が掲載されている。

また同書房から，「東京美術学校校友会誌叢書」として明治20年に設立された東京美術学校の校友会機関誌も復刻されつつある。『錦巷雑綴』（全2巻，平成4年，25,750円）は明治27－31年に発行された9冊。『校友会雑誌』（全1巻，平成4年，13,390円）は，明治32－34年に発行された5冊。『東京美術学校校友会月報 ── 第1期』（全3巻，平成4年，123,390円）は明治35－昭和7年までの分を順次刊行予定のもの。一つの学校内の団体の記録ではあるが，社会への影響力も少なくなく，時代の動向を知るためにも貴重な資料である。

大量の記録でしかも需要見込みが少ない資料は，図書による復刻では経済的に困難で，マイクロフィルム版による復刻が多い。こうしたマイクロフィルム版の中からも幾つかを紹介しておこう。

「マイクロフィルム版美術雑誌集成」は『国華』『日本美術』『中央美術』の3種の雑誌を集大成したものである。雄松堂書店による昨年の刊行で，全102リール・47カラーフィッシュ・1カラーリールという膨大なもので，合計価格も1,667,000円となる。

『国華』はよく知られるように，岡倉天

心らによって明治22年に創刊され現在にまで続く日本・東洋美術の雑誌である。創刊から平成3年までの1,149冊を収めたもの。

『日本美術』は岡倉らの設立した日本美術院が発行した雑誌で，明治31～大正5年の196冊を収める。日本美術院の活動は日本画だけというイメージが強いが，初期には図案部デザインによる工芸品の頒布会を行うなどもしているので，これからその活動の全貌が明らかにされよう。

『中央美術』は美術評論家田口掬汀の編集によるもので，多くの執筆者を擁し，大正期の代表的な美術雑誌の一つである。当時の美術界の動向を伝え，美術教育にも頁を割いている。大正4－昭和4年までの第Ⅰ期と昭和8－11年の第2期の合計203冊を収録する。

『アトリエ・生活美術』も同じく雄松堂書店からマイクロフィルム版でよみがえった。(平成4年，全50リール，750,000円)。大正13年の創刊で，戦時中は『生活美術』と改題され，昭和18年に休刊となるまでの245冊を収めている。

時代の動向を伝える媒体として新聞があるが，明治21年から昭和16年までの51年間にわたり，地方紙までを含めた全国新聞から美術関係の記事を集めたものが，東京美術学校編『近代美術関係新聞記事資料集成』(全71リール，平成3年，ゆまに書房刊，1,316,300円）である。

デザイン動向を知る一つの資料として博覧会がある。国立国会図書館蔵の「明治期産業翻訳書集成」の中に『万国博覧会編』（全14リール，平成元年，144,000円）があり，ウィーン博（明治6年）からシカゴ博（同26年）までの報告書類が収められている。

技術関係の図書は数多くあるが，デザイン関係者に比較的多く利用される『木材の工芸的利用』(昭和57年，林業科学技術振興所，20,000円）だけをあげておこう。原著は明治44年，農商務省山林局が2年を費やして全国調査を行った結果を記したものだけに，現在では大変貴重な記録となっている。

美術教育関係では『赤い鳥』と並んで大正期の芸術教育を推進した『芸術自由教育』(全1巻，平成5年，49,440円）が復刻された。大正10年に山本鼎・北原白秋らが集い，自由画教育や童謡運動を展開した10冊の雑誌。

以上，目に触れたものだけを掲げたが，今後も研究にとって貴重な資料の復刻が相次ぐことを望みたい。

**日野永一　兵庫教育大学**